



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	教職大学院年報第3号に寄せて(fulltext)
Author(s)	近藤,精一
Citation	東京学芸大学教職大学院年報, 3: 0-0
Issue Date	2015-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/138738
Publisher	東京学芸大学教職大学院
Rights	

教職大学院年報第3号に寄せて

近藤 精一（東京学芸大学教職大学院特任教授）

「先生、ハンガー、買ってくれませんか」

これは、教職大学院第一期生が、大学院当局に対して初めて要求した内容だった。

教職大学院設立当初の施設は実に貧弱だった。学生が使用できるスペースは、40人がやっと入れる教室がひとつ、流し場兼教材開発室、それと、資料室と称する物置代わりの部屋だけだった。

特に冬の教室は悲惨だった。カバンやバッグすら置くスペースのない教室に、コートやマフラーなどが加わり、教室は足の踏み場もないような状況になる。グループワーク、ワークショップなど、教職大学院に求められる多様な授業形態やアクティブな活動には、ほど遠い世界にあった。「先生、ハンガー、買ってくれませんか」

この要求は、学生たちが学びを進める上で、必要最低限の要求だった。当時、教職大学院設立に関わった者の一人として、この学生たちのいじらしくもささやかな要求には、今も目頭が熱くなる思いである。

大学教育はもとより、教育を支えるものとして、「ヒト」、「モノ」、「カネ」、「カリ」があげられる。設立当初の東京学芸大学教職大学院には、「モノ」が圧倒的に不足していた。それでも、めげなかったのは「教職大学院の施設設備は最低だが、学ぶ学生の質と教職員の熱は最高」との自負と誇りがあったからだった。それだけを強みに、学生も教職員も自らの教職大学院黎明期に課せられた使命に燃えていた。それは、さながら、かつて脚光を浴びたNHKのプロジェクトXの世界のようでもあった。

あれから7年の歳月を経て、東京学芸大学教職大学院の「ヒト」、「モノ」、「カネ」、「カリ」は大きく変わった。大学当局の配慮で教職大学院棟が建てられ、学生の学びのスペースも学びの効果を高める設備や教材開発のための機器も他大学に並んだ。また、設立以来の教授陣に加えて、新しい風を呼び起こす人材も加わり、重厚な指導体制が確立した。さらに、平成27年度からは、懸案であった学生の定員増が叶い、それに伴う「ヒト」、「モノ」、「カネ」の支援もいっそう現実味を帯びてきた。

そして、今、教職大学院の魂でもあるカリキュラム（「カリ」）も、新しい学校教育の創造を担う人材の育成と、我が国の教員養成における東京学芸大学の使命を受けて、さらに新しい光を帯び、確実な歩を進めようとしている。

だが、これに甘んじてはならないだろう。教員養成や人材育成に完成はない。新しいシステムも発足したその日から陳腐なものになることを肝に銘じ、絶えず研究と修養に努めることを自らに課す存在としての教職大学院でありたい。そして、「先生、ハンガー、買ってくれませんか」の要求に甘んじた草創期の学生たちの想いを刻みつづけられる教職大学院でありたい。